

## 『二重らせん』

ジェームス・D・ワトソン 著  
江上 不二夫、中村 桂子 訳 講談社文庫[1986]

## 『プラネテス』全4巻

幸村 誠 著 講談社コミックス[2001～2004]

## 『先端医療のルール』

一人体利用はどこまで許されるのか？  
棚島 次郎 著 講談社現代新書[2001]

生命科学は20世紀後半に急速に発達した新興の領域だが、生命現象の本質に迫るその衝撃力は、科学者の行為を社会が縛る必要を認識させ、「生命倫理」というこれも新しい学問ないし科学政策の領域を生み出した。許されることと許されないことを社会が決める科学者に守らせ、守らない者を罰する仕組みが、急速に先進国を中心にできあがってきた。まさにそのころ、われわれは新しい世紀を迎え、今日に至っている。

私自身職業としてかかわってきたこの分野の、こうした展開の先には、何があるだろうか。これからの10年、20年を考えるために、私はあえて問いたい。生命倫理を守らせるのが、私たちが科学に望むことなのだろうか、倫理指針に従っていれば、いい研究なのだろうか、と。

科学研究とは本来、あることが知りたいから、あるいはやってみようから、知ろうとし、やろうとするものである。何かの役に立つとか世のため人のためではなく、ただ自分がそれを知らないでは、やれないでは、居ても立ってもいられないから、するものである。そのためには世間から責められようと何でもやる、家族も魂も売り渡す、くらいの気持ちになるのが、本当の科学者だろう。そうして生まれた一級の成果を、素人も味わえるのが、人類に許された最高のぜいたくであり喜びではないか。

たとえば、生命科学の世紀を拓いた最も偉大な発見の一つ、DNAの分子構造を解明したジェームズ・ワトソンは、共同研究者クリックとともに、競争相手の他の研究者のデー

# 生命の研究の 掘りどころは何か 倫理ではなく

科学技術文明研究所  
主任研究員  
棚島次郎

タをこっそり見てまでも、自分たちが知りたいことを知ろうとする。そうした研究姿勢に、生化学者江上不二夫は違和感を表しつつも、日本の科学が一流になるためには、そういう科学者が出なければならないと認めている（ワトソン『二重らせん』とその訳者あとがき）。

フィクションだがそれゆえにもっと分かりやすく本質を突いているのが、近未来の宇宙開発時代を描いた幸村誠『プラネテス』だ。その第2巻で作者は、「わがままになるのが怖い奴に宇宙は拓けねえさ」と主人公の一人に言わせている。宇宙旅行の父と言われるロケット学者の草分けツイオルコフスキーの、「地球は人類にとってゆりかごだ。だがゆりかごで一生涯を過ごす者はいない」という名言も、登場人物たちに言わせれば、ただ宇宙に行きたいという彼個人の欲望を世間に認めさせるための、ほらに過ぎない。そうした精神

ぬでしま・じろう 1960年横浜市生まれ、88年、東京大学大学院社会学研究科修士、社会学博士。三菱化学生命科学研究所研究員を経て、2004年から現職。専門分野：先端医療を中心とした科学技術政策論。主著：『脳死・臓器移植と日本社会』弘文堂[1991]、『優生学と人間社会』講談社現代新書[2000]（共著）、『先端医療のルール』講談社現代新書[2001]（NIRA大来政策研究賞受賞）。

を一身に体现し、大勢の仲間を犠牲にしても新式エンジンの運転限界データを得ようとするロケット開発技術者が、主要キャラクターの一人として登場する。私には、マンガの彼の顔が、日本のヒトゲノム研究推進の第一人者で、倫理嫌い知られているある医学者の顔にダブって見える。そうだ、わがままでなければ、一流の研究はできないのだ。

だがもちろん、他の分野は知らず、少なくとも生命科学・医学に限っては、人を含めた生きものが相手なので、何をしてもいいということにはならない。筆者は、拙著『先端医療のルール』で、生命科学・医学の研究開発と臨床応用において守られるべき倫理について、体系的に見取り図を描いたつもりだった。日本でもそうした倫理規範が、必要なことの全体から見ればごく一部に過ぎないが、法令や行政指導として施行されるようになった。

そうだったからこそ、私はその先を考えたい。お国から倫理の枠をはめられなければ研究できないようでは、一流の研究はできないのではないか。これを知るためには何でもやる、そうでなければ科学は拓けない—そういう科学の危うい本質に誠実に向き合おうとしない者は、研究も倫理も語る資格はないのではないか。いまのおしきせの倫理の先に、それを平然と踏まえて乗り越えて、科学研究本来の性質に見合った、しかもパトロンである世間を納めさせられる、「生命科学の仁義」を打ち立てられないか。それが、私が自らこれからの10年に課した課題である。 ■